

日蓮大聖人御書全集

まつのだのごへんじ

松野殿御返事

さんがいむあん　こと

（三界無安の事）

新版
1997
〜
1999

まつのどのごへんじ さんがいむあん こと

松野殿御返事（三界無安の事）

けんじ ねん がつ にち

建治 4 年（78） 2 月 13 日

さい まつののろくろうざ えもん
57 歳 松野六郎左衛門

しゅじゅ もの おく た そうら お さんちゅう 住 おも や

種々の物、送り給ひ候い畢わんぬ。山中のすまい思い遣

たま ゆき なか 踏 わ おんとぶら そうろう おんこころざし

らせ給いて、雪の中ふみ分けて御訪い候こと、御志、

さだ ほけきよう じゅうらせつ し そうろう

定めて法華経・十羅刹も知ろしめし候らん。

ねはんぎよう い じんめい とどろ さんすい

さては、涅槃経に云わく「人命の停まらざることは山水に

す きよう そんな あす たも がた もん

も過ぎたり。今日は存すといえども、明日は保ち難し」文。

まやきよう い たと せんだら ひつじ か とけ いた

摩耶経に云わく「譬えば旃陀羅の羊を駆つて屠家に至るが

じんめい ほ ほしち ちか もん

ごとく、人命もまたかくのごとく歩々死地に近づく」文。

ほけきよう

い

さんがい

やす

かたく

法華經に云わく「三界は安きことなし、なお火宅のごとし。

しゆく じゆうまん

ふい

とううんぬん

衆苦は充滿して、はなはだ怖畏すべし」等云々。これらの

きようもん

われ

じぶ

だいかくせそん

まつだい

ぼんぷ

諫

たま

經文は、我らが慈父・大覺世尊、末代の凡夫をいさめ給い、

稚

こ

差

おどろ

たま

きようもん

いとけなき子どもをさし驚かし給える經文なり。

しゆく

おどろ

こころ

せつな

どうしん

おこ

しかりといえども、須臾も驚く心なく、刹那も道心を発

のべす

いちや

うち

裸

み

さず、野辺に捨てられなば一夜の中にはだかになるべき身

飾

暇

い

ころも

かさ

励

をかざらんがために、いとまを入れ衣を重ねんとはげむ。

いのちお

みつか

うち

みず

な

なが

ちり

な

ち

命終わりなば、三日の内に水と成って流れ、塵と成って地

交

けむり

な

てん

上

跡

見

にまじわり、煙と成って天にのぼり、あともみえずなるべ

き身みを養やしなわんとて、多おほくの財たからをたあくわう。このことことわりは古事そうらふり候こといぬ。

ただし、当世とうせいの体ていこそ哀あわれに候そうらえ。日本国にほんこく、数年すうねんの間あいだ、
ううつづつづ飢飢渴渴行行ええじじきき絶絶ちちくく類類くく尽尽
打ち続つづきけかちゆきて、衣食えじきたえ、畜ちくるいくをば食くいつくし、
けけつつくくひひとと食食ものしものゆしつつたたいいいししびびととしょうに
結句けつこ、人ひとをくくらう者出来しやうにして、あるいは死人しやうに、あるいは小児しょうに、
あるいは病人等びやうにんとうの肉にくを裂さき取とつて、魚うお・鹿しか等とうに加くわえて売うり
しかば、人ひとこれかを食買かいく食えり。この国くに、存ぞんの外ほかに大悪鬼だいあくきと
なれり。

また、去年こぞの春はるより今年ことしの二月中にがつちゆうじゆん旬えきまで、疫病国えきびようくにに

じゆうまん

じつけ

ごけ

ひやつけ

ごじゆつけ

みな病

し

充滿す。

十家に五家、

百家に五十家、

皆やみ死し、あるい

み 病

こころ

だいく

あ

病

もの

おそ

は身はやまねども、心は大苦に値えり。やむ者よりも怖ろ

い のこ

かげ

添

し。たまたま生き残りたれども、あるいは影のごとくそい

こ

まなこ

かお

並

ふさい

てんち

し子もなく、眼のごとく面をならべし夫妻もなく、天地の

たの

ふぼ

い

なに

こころ

ごとく憑みし父母もおわせず。生きても何かせん。心あら

ひとびと

よ いと

さんがい

やす

ん人々、いかでか世を厭わざらん。「三界は安きことなし」

ほとけと

たま

そうら

ほう

す

み

そうろう

とは仏説き給いて候えども、法に過ぎて見え候。

よ

ぼんぷ

そうら

ほとけ

しかるに、予は凡夫にて候えども、かかるべきことを仏

か

と

置

たま

そうろう

こくしゆ

もう

聞

まい

兼ねて説きおかせ給いて候を、国主に申しきかせ進らせ

そうら

おんもち

あだ

候いぬ。それにつけて御用いはなくしていよいよ怨をなせ

ちからおよ

くにすで

ほうぼう

な

ほけきよう

かたき

しかば、力及ばず、この国既に謗法と成りぬ。法華經の敵

な
そうら

さんぜじつぼう

ぶつしん

かたき

な

に成り候えば、三世十方の仏神の敵と成れり。

みこころ

すい

たま

そうら

にちれん

たいかあ

御心にも推せさせ給い候え。日蓮、いかなる大科有りと

ほけきよう

ぎようじや

なむあみだぶつ

もう

も、法華經の行者なるべし。南無阿弥陀仏と申さば、いか

たいかあ

ねんぶつしや

な

もう

なる大科有りと、念仏者にて無しとは申しがたし。

なんみようほうれんげきよう

わ

くち

とな

そうろうゆえ

の

う

張

南無妙法蓮華經と我が口にも唱え候故に、罵られ、打ちは

なが

いのち

およ

すす

もう

ほけきよう

ぎようじや

られ、流され、命に及びしかども勧め申せば法華經の行者

ほけきよう

ぎようじや

あだ

もの

あびじごく

ひと

さだ

ならずや。法華經には、行者を怨む者は阿鼻地獄の人と定

し まき ほとけ いっちゅうこうの まつだい ほけきよう
む。四の巻には、仏を一中劫罵るよりも、末代の法華經の

ぎようじゃ にく つみふか と しち まき ぎようじゃ かる

行者を悪む罪深しと説かれたり。七の巻には、行者を輕し

ひとびと せんごうあびじごく い と たま ご まき

めし人々、千劫阿鼻地獄に入ると説き給えり。五の巻には、

わ まっせまつぼう い ほけきよう ぎようじゃあ とき

我が末世末法に入つて、法華經の行者有るべし、その時、

くに じかい はかいとう むりようむへん そうとうあつ こくしゆ ざん

その国に持戒・破戒等の無量無辺の僧等集まつて国主に讒

げん なが うしな と きようもん

言して流し失うべしと説かれたり。しかるに、かかる經文

ふごう そうら お みらい ほとけ な そうら

かたがた符合し候い畢わんぬ。未来に仏に成り候わんこ

うたが おぼ そうろう いさい げんざん ときもう

と、疑いなく覚え候。委細は見参の時申すべし。

けんじしねんつちのえとらにがつじゆうさんにち にちれん かおう

建治四年戊寅二月十三日 日蓮 花押

まつのだのごへんじ
松野殿御返事